

大学選びの 視点

第3回

大学教育に関する情報



このシリーズでは、高校生が志望大学を考えるときに、どのような情報を提供し、指導に活かしていくのか、高校の先生方へのインタビューやアンケートの結果などを中心に紹介していく。

今回のテーマは、「大学教育に関する情報」である。これには、初年次教育や入学前教育、カリキュラムや設置科目、演習やゼミの活動内容、海外留学や課外研究の内容、図書館等の施設・設備、担任制や学修アドバイザーなどが含まれる。近年では「大学の教育力」に注目が集まり、熱心に取り組む大学も増えている。

しかし、大学教育に関する情報は多岐にわたること、大学によって力を入れている点異なること、大学が発信する特徴や取り組みの意義が理解しにくいこと、内容の比較が難しいことなどから、進路指導において活用しにくいと感じる先生方も多いようだ。

こうした大学教育に関する情報の見方や、指導での活用方法について、アンケートで寄せられたコメントを紹介する。さらに、2名の先生に、具体的にどのような点に注目しているか、生徒指導の際にどのように活用しているかなどをインタビューした。

ガイドライン編集部では、大学教育に関して、どのような情報を進路指導に活用しているか『ガイドライン』の読者の先生方や「ひらく 日本の大学」データベースを活用いただいている先生方にアンケートを実施した。先生方のコメントを紹介する。

大学教育について注目している情報

● カリキュラムの体系・設置科目等

- ▶ 学科の詳細を理解するため、生徒には履修科目やカリキュラムに必ず目を通させている。初年度だけでなく、学年を重ねてからの教育内容を重視している。
- ▶ 以前、外国語を勉強したいが、経済も勉強したいという生徒がいたときには、カリキュラムを調べさせ、どの程度まで外国語を履修できるか、また留学もどの国の大学へ可能であるかを調べさせていました。
- ▶ 専門教育と基礎教育のバランスについて、単位数に注目して調べさせる。
- ▶ 設置されている科目などから、幅広く学ぶことができるかを見ている。

- ▶ 近年、教員免許状の取得を希望する生徒が多いので、まずはそこから大学教育の情報に注目させている。さらには英語のカリキュラムの充実具合や指導状況を気にして見るようにしている。
- ▶ 学部内でのコース決定の時期（理学部での数学・物理・化学・地学の選択など）を確認している。
- ▶ 高校で履修していない科目についての補習教育の状況に注目している。

● 少人数教育や学生の主体的な学修の状況等

- ▶ 看護系などで実習がどれくらいあるか、化学系でどれだけ実験の授業があるかは焦点となる。しかし同じ化学系でも、例えば研究者になるのか、理科教員になるのかで大学に求めるものが違うので、生徒個々の目的に合った大学選びを心がけている。
- ▶ 座学中心か、実践も多いのかはよく確認するように話しています。
- ▶ 2年次のゼミの有無に注目している。一番伸びる時期に、アクティブラーニング型授業がないのは問題だと感じている。

- ▶ゼミの活動内容は参考にしよう指導します。ゼミの活動内容と構成人数をポイントにしています。
- ▶海外留学先での単位互換制度がある大学や、追加の授業料が不要な大学が近年増えているので、留学等を考えている生徒にはしっかりと調べさせる。
- ▶留学に関しては単位互換が可能か、費用面、受け入れ先の大学などを確認している。
- ▶留学を重視していますが、全員が行けるわけではない場合も多いので、条件を確認させています。

● 図書館等の施設・設備の状況

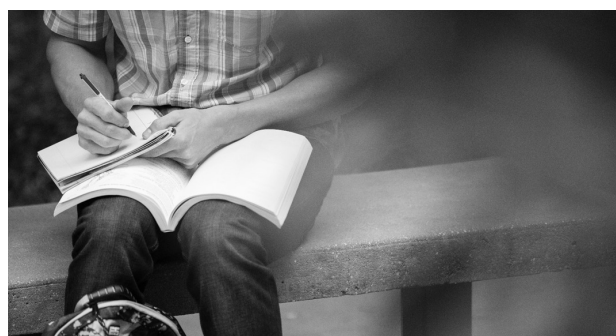
- ▶学生の交流が可能なスペースや、落ち着いて勉強ができるスペースがあるかどうか、気にしている。
- ▶大学訪問をしたときは、できる限り図書館を見せてもらい、蔵書の規模でその大学の研究に関する姿勢を推測しています。
- ▶図書館の蔵書数や開館時間、情報機器の充実度を調べることもあります。
- ▶進路説明会等で大学訪問をした際には、図書館を見ます。大学が学生の勉強の場を重視し支援しているか、よくわかると思います。図書館の雰囲気の良い大学は、伸びていきます。

● 担任・学修アドバイザーなどによる学修支援体制

- ▶不登校対策や学修支援でも、事務職員や教員だけでは対応が難しい学生たちがこれからどんどん入学すると思います。そのため、高校とは異なる形でしょうが、大学の担任制に注目しています。
- ▶クラス担任制度やアドバイザーなどは、大学生活と高校生活のギャップに戸惑う学生が増えてきているなか、必須だと思う。しかし、以前の大学では、そうした機能は例えば学生サークルなどが担っていたことを考えると、近年の学生は受け身ではないかと感じ、残念でもある。

大学教育に関する情報を活用する場面等

- ▶特に推薦・AO入試を受験する生徒にとっては、志望理由書指導や面接・小論文・プレゼンテーション対策として、カリキュラムやゼミの活動内容を調べておくことは不可欠だと考えている。



- ▶推薦入試やAO入試を受験する生徒には、カリキュラム構成、演習・ゼミの活動内容、海外留学や課外研究の内容などは、詳しく調べるように指導している。
- ▶有名大学に進学するのが難しい場合、あまり知名度が高くない大学であっても、学修支援が充実している大学については、そのことを生徒や保護者に伝え、志望校として考えるように勧める。
- ▶全入に近い大学を生徒に勧める場合、いかに丁寧な指導を行ってくれるかどうか知りたいので、学生支援の体制については特に注目している。
- ▶地方の公立大学、私立大学においては、入試の偏差値が高くないでもきめ細やかな指導をしている場合も多いので、その点は留意する。

大学教育に関する情報を活用する際の課題等

- ▶アクティブラーニングの導入状況やリメディアル教育の有無などを確認したいが、難しいのが実態である。
- ▶実際に生徒に調べさせようとしてもわからないことが多いです。例えばゼミは必須か希望者なのか、第2外国語は必須かなど、履修要綱を取り寄せないとわからないことが多く、難しさを感じています。
- ▶大学教育に関する情報については、あまり指示していません。生徒もそこまで理解しきれないのが現状です。ただし、推薦入試やAO入試を受ける生徒には調べさせます。
- ▶生徒本人だけではデータを読み取ることが難しいので、必ず保護者ガイダンスをし、データは保護者も一緒に見るよう促しています。
- ▶生徒から、在学中の海外留学制度について質問されることが多いが、客観的に差異を示す資料が少なく、答に困ることがある。

▶大学教育に関する情報は、それほど活用していない。大学によって情報の公開の仕方がそれぞれであり、比較することは容易ではないため。

▶教育に関する情報を紹介することはあるが、それだけでなく、オープンキャンパス等の機会に実際にそれを確認することが大切だと生徒には言っている。

Interview 1

高校の先生に聞く、進路指導での大学教育に関する情報の活用

札幌大谷高等学校 佐藤史先生

多面的な情報を紹介し生徒の大学選びを促す

現在、大学に関するさまざまな情報が公表されています。しかし、生徒の大学選びの様子を見てみると、設置されている学部・学科や大学入試の難易度、卒業後の進路などに差がないときに、オープンキャンパスの印象などで進学先の大学を決める場合も少なくありません。最終的に印象で決めることは悪くはありませんが、私としては、その前に大学を多面的に見て、4年間（6年間）の学ぶ場として相応しいかどうか吟味してもらいたいと考えています。そこで、生徒の性格や時期に応じて、大学に関するさまざまな情報を紹介しています。

ただし、教員からすぐに情報を与えるのではなく、まずは生徒自身が調べるように指導しています。近年の高校生は、情報は与えられるものという意識が強く、教員からの働きかけを待つ傾向があります。また、本校は伝統的に、生徒一人ひとりを大切にしている指導を心がけていることもあり、教員も教えようとしがちでした。しかし、生徒の将来のことを考えると、主体的に学ぶ力を身につけさせることも重要です。そこで、進路指導においても生徒の自立を促すような指導を心がけています。例えば、進路指導室のパソコンや資料を生徒が自由に使えるようにして、まず生徒に調べさせるように指導しています。

卒業生の状況報告や学生支援の体制から「面倒見の良い大学か」を見る

私は大学入試の難易度や就職率等のほか、教育の特色や教育支援の内容にも注目しています。また、本校を訪問する大学の担当者の話を聞く中で、それぞれの大学の面倒見の良さを確認しています。

本校を訪問し卒業生の状況を報告してくれる大学は多くありますが、卒業生一人ひとりについてカルテを作り、サークル等での活動の様子まで詳しく伝える大学がある一方で、単位取得や欠席状況等を読み上げるだけの大学もあります。また、連絡の頻度も、退学の兆候が見られるなど気になる点があると随時伝えてくれる大学があれば、半期に1回のみといった大学もあり、大きな差があります。

本校の場合、卒業生の2割程度が本州の大学に進学します。そうした卒業生の様子は高校も保護者もわかりませんから、一人ひとりの学生に向き合い、状況を随時連絡してくれる大学かどうかは大切です。

大学によっては、職員や研究室・ゼミの教員だけでなく、担任やアドバイザー教員、入試担当の教員など、多くの教職員が学生に関わる体制を整えています。そうした、全学的に学生を見守ろうとする大学は信頼できます。

同様に、退学・除籍を防ぐための取り組みにも注目しています。退学については、大学進学前の指導の責任もありますが、大学での学びに適應できるかどうかは、特に大学1年次の取り組みの影響が大きいと感じています。そのため、大学に適應するための教育プログラムや行事の有無を確認しています。

関連して、大学の規模も見ます。あまりに学生数の多い大学だと、大人数講義が中心で少人数教育が少なく、学習指導も行き届かない場合があると思うからです。ただし、性格によっても向き不向きがあるため、重視させるかどうかは生徒によって変えています。

大学はパンフレットやホームページで教育や研究の特色をアピールしますが、一方で退学率や学生に対する教員の数（ST比）など、あまり積極的に公表しない情報もあります。私が大学について調べる際には、そうした両面を見るようにしています。

現在はほとんど公表されていませんが、大学卒業3年後の離職率が見られたら良いでしょう。就職率や産業別・職業別の就職先は多くの大学が公表していますが、どのような分野に進んでも「働く」という点では同じです。それよりも、働き続ける力を持っているか、キャリアアップにつながる転職をしているか、学生時代にマッチングする企業を選んでいるか、といった点が重要だと思います。卒業生について追跡調査し、そうした状況を報告してくれる大学があれば、生徒にも紹介したいと思います。

また、卒業させたら終わりではない、という意識を持つことは、高校教員にも必要です。大学からの報告を待つだけでなく、こちらから卒業生の様子を聞くなど情報を交換しながら、一人ひとりの卒業生を見守っていくことが重要なのではないのでしょうか。

Interview 2

高校の先生に聞く、進路指導での
大学卒業後の進路情報の活用

明星中学高等学校 上杉剛先生

大学に関する資料やオープンキャンパスを活用し
大学での学びに関する具体的なイメージを持たせる

私は3年生の文系選抜クラスの担任を務めており、月に2回のホームルームの時間に、さまざまな資料を用いて、進路に関する情報を提供しています。その際に注意している点は、大学での具体的な学びのイメージを生徒に持たせることです。生徒は第一志望、第二志望の大学についてはよく調べていますが、それ以外の大学については、あまり情報を持っていません。併願する大学を、大学入試の偏差値や所在地から絞り込むと大学調べにも意欲が上がりませんから、生徒にはまず、さまざまな大学についてのイメージを持たせた上で、大学調べを促すようにしています。

今年の1学期には、『ガイドライン特別号「ひらく日本の大学」から見る大学の教育力』を使ってみました。本校の生徒は、自宅から通える範囲の大学を志望する 경우가ほとんどです。地方の国立大学よりは自宅から通える私立大学を受験校として考えます。そこで、受験を考える生徒が多い大学である、お茶の水女子大学のカリキュラム体系、早稲田大学政治経済学部の英語教育、学習院大学文学部の卒業論文の評価、法政大学のキャリアガイダンスに関する記事を配布し、読ませてみました。こういった記事を読むことで、大学の4年間の中で学生がどのように学び、どのように評価されるのか、考えさせることが目的です。記事には、「GPA」など大学教育に特有用語も出てきて、特別号にはそれらを解説した用語集もありますが、それだけでなく、実際の大学の取り組みと合わせて見ることで理解しやすくなり、大学での学びに関心を持った生徒もいたようです。

また、大学のイメージを持たせるためには、大学に行って雰囲気を感じさせることが重要です。オープンキャンパスなども活用していますが、最近は「イベント」として行う大学も増えているため、普段の大学の姿に接する事も必要ではないかとも考えています。本校は東京都府中市にあり、近隣に多くの大学がありますから、普段の大学に行って、学生の様子や学内の施設・設備などを見てくるように伝えています。実際に、数人の生徒は放課後等に大学を見に行っているようです。

オープンキャンパスについては、保護者も参加するように勧めています。高校生では見えない部分に気がつく場合もありますし、学費を負担するのは多くは保護者であり、進学先の様子を知ることが重要だと思う

からです。家庭によっては生徒と保護者が別々に参加し、帰宅後に情報を共有する場合もあるようです。

教育の狙いや特色が伝わりやすい情報提供を

大学の先生方の話を聞いていると、教育改善に非常に力を入れていると感じています。しかし、そうした努力が高校生や高校教員に、あまり伝わっていないのが現状です。

例えば、大学教育における「海外留学」は、ここ10年で大きく変わりました。留学を推奨する大学が増えましたし、留学先を見ても、以前は欧米の大学ばかりでしたが、現在はアジアを中心にさまざまな地域に広がっています。また、現地の大学の授業を受ける場合と、併設の語学学校で学ぶ場合があるなど、留学先での学び方も多様です。しかし、なぜ海外留学を学生に勧めるのか、なぜアジアなのか、なぜ語学学校に行く必要があるのかなどが明確に示されていない場合もあります。そうすると、生徒は海外留学の重要性をあまり感じられません。まず、海外留学制度を設ける大学の狙いや学士課程教育における位置づけを、明らかにすることが必要だと思います。

カリキュラム全体を通じた教育の狙いが伝わりにくいことも課題です。大学のホームページ等を見ると、「この学部で学ぶとこのような力が身につく」という情報が出てきますが、そのために具体的にどのような教育を行っているのかは見えにくいのです。カリキュラム全体で何をめざして、そのためにどのような科目を置いているかなど、生徒や保護者にもわかりやすい解説があればよいのですが、それができていない大学は多くありません。同じ名称の学部でも、大学によって目標は異なるはずです。カリキュラムの解説を通じて大学の狙いが明確になることで、特色や他大学との違いも見えて、生徒が受験する大学も検討しやすくなると思います。

近年は高校生の気質も変わってきており、特に真面目な生徒ほど、学びたい分野を極端に絞り込む傾向があります。もちろん、専門性を極めることは重要ですが、多様な分野を学び汎用的な知識・技能を身につけることも必要です。また、大学進学後に他分野に触れ、希望する進路等が変わることもあるはずです。大学での学びの幅広さが伝わるように情報を提供することも必要でしょう。

教育改善を進めるとともに、教育の取り組みに関する発信力を高めることを、大学には期待しています。